

ヨハネ「福音書」16章と抑うつポジション (1)

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成14年11月5日受理)

Joh. „Evangelium“ Kap. 16 und die depressive Position (1)

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge
Kuraschiki, 701-0193, Japan
(Received on November 5, 2002)*

概 要

ヨハネ「福音書」16章ではイエスは弟子たちの抑うつの悲哀を強調しておられるが、この悲哀は知性化的論文では決して正当に理解されない。抑うつの情感を把握する方法が獲得されなければならない。かの時のイエスの弟子たちにとってのイエス喪失とヨハネ共同体にとってのイエス喪失が一個同一のテキストに書き込まれている。どのような効果が産出されているのだろうか。ジル・フォコニエのマッピング理論がそのための鍵を与えてくれる。キーワード：ヨハネ「福音書」、抑うつポジション、ジル・フォコニエ

Resümee

Im Joh 16 betont Jesus die depressive Trauer der Jünger, aber diese Trauer wird bei intellektualisierten Arbeiten nie richtig untergenommen. Wir müssen eine Methode bekommen, durch die wir die depressiven Affekte auffassen können. Die Verlust Jesu für seine Jünger in jener Zeit und diejenige für die johaneischen Gemeinde sind in einem demselben Text geschrieben. Was für Effekte produziert werden? Dazu gibt die mapping theory von Gilles Fauconnier einen Schlüssel. **Stichwörter:** Joh. „Evangelium“, Depressive Position, Gilles Fauconnier

はじめに

0-0 絶対者の存在に触れた直接体験から語り出され、これを聞き取る者において当の直接体験が反復されて、この者の人格と命を産み直すともみえるほどに変化させる言語活動、それが宗教言語の FORCE であろう。以下はこうした真に革命的な宗教言語と、奥深い再生力をもってそれに対抗する既存象徴系との葛藤を念頭に置いて論ぜられる。

0-1 ヨハネ「福音書」は、イエスの逮捕・裁き・処刑というあの受難の一日の前夜に、イエスが内輪の弟子たちに向かって長い「告別説教」を行われたことを告げている。このような説教は共観福音書では語られていない。この「告別説教」の内容を聞く姿勢こそが問われている。

共観福音書のフレームに慣れた読者は、13-14章の「告別説教」の末尾で、「さあ、立て。ここから出かけよう」というイエスの言葉を聞くやいなや、思わず緊張するはずである。いよいよイエスが「上げられる」、(狭義の)受難の道行きが始まるぞ、と。当然のことである。しかし不思議なことに読者は15章の冒頭で「わたしはまことのぶどうの木」というイエスの語りを聞くのである。いぶかりながら聞き続けてみると、ここから再び長い「告別説教」が16章末尾に至るまで語り直されたのを知るに至る。これが終わる段階で読者は、今度こそ例の受難物語が開始するだろうと予期してもう一度身構える。ところがその緊張をはぐらかすように、次の17章では、イエスは一転天を仰ぎ、父なる神へのいわゆる「大祭司の祈り」を長々と捧げられる。18章に入ってやっと読者は、受難物語開始のナレーションに出会うことになる。

0-2 ここに進行している事態は、比較を絶したレトリックの巨匠ヨハネが遂行する強力な語用論である。ごく普通のナイーヴな読者が、物語の結節結節の異様さ不自然さに翻弄されることを率直に重ねる限り、この語用論の効果はますます甚大である。

物語の展開が自分の信仰の生にとって異様であることを感受し、それに反撥しつつ牽引され、このようにして物語の推移に〈情感的・前言語的に巻き込まれていく読者〉は、イエスが「上げられる」この過程で、同時に「わたしのイエスの死と抱き合わせにして、このわたし自身の死」を体験する【抑うつポジション出現の契機】。これこそがこのテキスト範囲での語用論の効果の核心である〔9章～16章では「弟子たち（結局「読者であるわたし／わたしたち）」が上げられる」というのが裏のテーマとなっていたのであった〕。ヨハネテキストのこうした語用論の解体的作用圏の上空へと身をそらした高みから、「テキスト編集上の不手際」をあげつらったりする〈知性化的・客観主義的観察者〉は、ヨハネからのメッセージ、イエスからの招きを聞くことは不可能である。ヨハネ「福音書」は全巻を通じて、「イエスを信じているつもりの人たち」の心のうちで既成化し日常化している〈受難物語についての人々の想定とそれに依拠した生〉を大きく揺さぶることを意図している。出来事としての受難の物語を「図」とするなら、これが語り出されたり受容されたりする基盤、背景、前提ともいえる「地」、フレームを解体再編することを目指している。読者において「図」としての「イエス受難の意味が激変すること」を意図するからである（それはマルコの配慮と作業手続きの比ではない）。このような手続きをもってヨハネ「福音書」は読者を駆り立て、「イエスの受難が同時にこの自分の受難であるという主体的意味を構築すること」を促しているのである（13章から17章の間で「イエスの言葉」が一挙に溢れているので、読者の意識はとかくその内容に集中するが、この範囲で「言語形式により顕示される意味（＝顕意 explicature）」に対して「語用論に促されて読者が構築する意味（＝佩意 implicature）」の重要度が減じているのではなく、むしろ逆に激増しているのである）。

0-3 以下に掲げるイエスの言葉は、イエスが「上げられる」という出来事においてこそイエスという「全体対象」＝「全時的存在としての人の子・イエス像」

は知られるのだということを告げている【抑うつポジションの成果。なお後述のトーマス・オグデンは抑うつポジションを「歴史的ポジション」と呼ぶべきだと提案している。抑うつポジションで成立する「全体対象」が〈対象の歴史が全体として一挙に知られる〉という特性を持つことに強く注目するからである】。

右の一連の聖句の、「人の子が上げられる」というテーマを耳にした瞬間、読者のからだ全体が「対象喪失の抑うつ的情感・パッション」の電撃に撃たれるのではないならば、読み取りは失敗したのである。この読者は知性化的知識の増加は得るかも知れないが、「全体対象としての全時的人の子・イエス」に直接体験として遭遇することは決してできず、従って「上からの生まれ変わり・人格変化」はあり得ないのである（後出1-2参照）。

3:13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、
天に上った者はだれもない。
3:14 そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、
人の子も上げられねばならない。
3:15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

12:32 わたしは地上から上げられるとき、
すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。

8:28 そこで、イエスは言われた。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。

6:61 イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。
「あなたがたはこのことにつまずくのか。
6:62 それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。

0-4 繰り返して確認する。救い主キリスト・イエスと直接体験として出会うことができるのは——つまり復活のイエスとの遭遇を体験できるのは——、まさにイエスの喪失を、「髪振りかざしからだ全体で悲しみ、慟哭の絶叫を上げる者」、「喪われた救い主を全身全霊をもって熱烈に求める（ゼーテインする）者」のみなのだということ。このことを理解させようとするためにこそ、16章前半のイエスの言葉のなかで「悲しみリュペー、悲しむリュペオー、およびその関連語彙」が格別に強調して語られていたのである【対象喪失のもとでの悲哀という、抑うつ的激情・パッションのないところに「全体対象」は成立し得ない】。空虚な墓でのマグダラのマリアの絶叫を想起せよ【「神の沈黙」に際してのイスラエルの抑うつ的激情の回帰——〈言なるイエス〉の喪失とは、イスラエルの歴史内部では「神の沈黙」の新たな反復を意味する】。

実にこの16章テキストは、もっとも強い意味で「対象喪失の抑うつ的悲哀の激情・パッションと全体対象成立、言語の獲得」という抑うつポジション論の根幹とするものを照らし出す語りとなっているのである。近代的自我のもとでの聖書学はどのように構造的・重層的にかつ一貫して強調された抑うつ的情感をすら、その積極的な考察対象に据える姿勢も視座も方法も形成しなかったように思われる。

イエス昇天後、求める者のところへ遣られるとされる「助け主・弁護者（パラクレートス）」とは、イエス喪失体験の下での痛切な悲哀・自失の絶叫によって「傍らへと（パラ）」「呼び求められた者（クレートス）」以外ではないのにちがいない【この出来事のいわば此岸的たとえば、抑うつ体験の極北での象徴形成であろう】。ところで10章でイエスは、天に帰られるに際し、信ずる者を名で呼びよせられる（フォーネインされる）のだと告げられた。イエス（を通してイスラエルの神）に前もって呼ばれていることに（潜在的に）気付いている者——イエスとその父なる神からの先行する愛を（潜在的に）感受している者——のみが、イエス喪失の暗夜を

心底から悲しみ、失われたものの大きさに絶望して、助けを呼び求めることができるのだ。

近代的自我のロゴス中心主義を突き崩し、「情感の蓋を取る解釈」を遂行することの不可避性。

本小論は「ヨハネ『福音書』16章を抑うつポジションの視座から読む」という一連の作業の序論部をなす。

以下、第一章でゼンドリン「体感傾聴法（フォーカシング）理論」、第二章でフォコニエ「マッピング理論」、を参照しつつ、テキスト分析に向かうための土俵整理を行う。

第一章 ジェンドリン「体感傾聴法（フォーカシング）理論」との対話

1-0 クリステヴァがその記号論・テキスト論を華々しく発表していた十年も前にアメリカのカウンセリングの現場で、現象学者を自認するある哲学者が〈直接体験が語り出されるメカニズム〉について、示唆に富む驚くべき発見を公表した。ユージン・T・ジェンドリン、その人である。彼が発見したのは、自己創造的な人格変化が生ずる際には、必ず先ず身体過程が開始するのであり、これへの気づきと応答から新しい言語過程が、当の個人の既成の言語系を突き破って、出現するのだという、ダイナミックな体験象徴化過程である。この発見とその理論化に基づいて彼の創始した療法と技法は、いま活力をもって（日本でも）拡大していつている。

村瀬孝雄編訳『体験過程と心理療法』牧書店 1966 新装版ナツメ社 1981はジェンドリンの1964年までの論文を集めたものであり、まことに刺激的である。諸富祥彦「E.T. ジェンドリンの哲学（その1／その2）」（千葉大学教育学部研究紀要 第47/48巻 教育科学編 1999/2000）はジェンドリンの60年代、70年代の現象学と言語分析をめぐる論文を考察したものである。哲学関係では他にジェンドリン・池見著『セロビープロセスの小さな一歩』金剛出版 1999。技法解説で優れているのはアン・ワイザー・コーネルのもので、三種翻訳されている。ジェンドリン本人の著作は『フォーカシング志向心理療法（上／下）』金剛出版 1998/9 原著 1996がまず読まれるべきであろう。

1-1 Thomas H. Ogden*はイントロ・サイキックに理解されるクラインの投影同一〈視〉論の持っているインパクトを深める方向で、インター・パーソナルな投影同一〈化〉論を構築していった。ウィニコットの仕事を参照軸に据えてビオンやローゼンフェルトのクライン理論への貢献の特徴を「主体－対象空間の豊富化」として読み取り、投影側と受容（返送）側との「弁証法的な相互的主体創造過程」を記述したところに、オグデンの秀逸な貢献がある。

この点についてただちに筆者の視点を述べておく。オグデンによって投影同一化論が、創造的な「インターパーソナルでしかも主体的な空間的相互活動」として豊かに発展された。しかしそれによってむしろ、クラインのイントロ・サイキックな記述のなかに窺われる、〈超越へと開かれた垂直な方向線〉が消し去られる危険が出てきた。抑圧ポジションにおける主体の「断念」の深さを含め、生命体としての主体性が丸ごと受容側へと委ねられるその「全託」の方向性のなかに、〈垂直軸での何ものかへの主体の応答〉を予感的に読み取る傾向がクラインにはあるのである。ヨハネ「福音書」を読解するための象徴化理論を模索するわれわれには、クラインのこのような垂直軸へ感応する傾向を明確に引き出し展開することが求められている。

*狩野監訳・藤山訳『こころのマトリックス——対象関係論との対話——』岩崎学術出版社 1996

原著：The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue 1986

和田訳『「あいだ」の空間——精神分析の第三主体——』新評論 1996 原著：Subjects of Analysis 1995

1-2 オグデンがフォーミュレートする「体験」の「過程性」と、「対人的相互作用」の「創造的性格」に関して、ロジャーズ=ジェンドリン師弟が追究した、クライアント中心療法の相互作用が発揮される濃密にポテンシャルな空間での「体験の象徴化過程論」が（特にユージン・ジェンドリンのそれが、術語の用法を含めて）強い影響を与えていると考えられるのである。

ロジャーズはカウンセリングでの面談がクライアントの急速な人格変化を実現して成功するときの要因分析に努めたが、ジェンドリンはこの調査研究を継承した（分析した面談記録盤の枚数は一説に「数千枚」のオーダーだという）。その結果彼は、クライアントの注意が「からだに感じる違和感のようなもの」に向かっている、これを自分自身の口で「言語化」しようと努めているかどうかに人格変化の、従って面談成功の最大の鍵があることを発見したのである。彼とその同僚はクライアントの発語がどれだけ身体の前言語的な「体験流」（＝彼らの創出した操作概念）に根差しているかを測定する尺度（EXP スケール）を考案し、これを面談記録の発言部分の数分のセグメントに適用して面談成功予測に用いることにした。このように丁寧に操作的に整えられた手法に基づいて実施された彼らの調査結果（1969年）は驚くべきものであった。カウンセリングの最初の二回のセッションでのクライアントの発言を数セグメント測定するだけで、そのカウンセリングのシリーズが成功するか否かがほとんど確実に予測できる、というものである（日本の療法家は日本語臨床のためのスケールを作製し、使用している）。こうした調査研究をうけてジェンドリンは、クライアントが自力をもってなす体感と発語を往復する試行と、カウンセラーがこれを徹底的共感的に傾聴しつつ行う「伝え返し」との間に創造的な相互作用の空間（ウィニコット、オグデンの空間論と反響し合う！）が成立することの重要性を指摘したのであった（この空間論の存在が、同じく身体過程をフォーカスする優れた二つの方法、〈プロセス指向心理学〉、〈ヴィパッサナー瞑想〉——前者はシャーマニズムへと開かれていき、後者は釈迦の身体注視法を継承するが、これら三者の相互照射が盛り上がっていくだろう——との相違点である）。これはロジャーズ技法がもつ「相互的な人間創造」の核心的意義を強調することとなった。

ここに創出された理論が「フォーカシング focusing」理論である。いろいろな技法の心理療法の中で、そしてセルフヘルプの技法として、「フォーカシング」はいま活力を持って広がっている。筆者は「フォーカシング」、「フェルトセンス」というカタカナ表記の呼び名をそれぞれ「体感傾聴法」、「体感」という、からだに染みついている本来の日本語で呼びたい（精神分析の「日本語臨床」グループに学びつつ）。体験過程の促進が日本語空間でなされるということをもっともっと真剣に重視するべきであると考え、日本語環境で生まれた優れた療法「内観法」にこの技法が導入されることを望んでいるからである（さらに筆者は、「体験過程」と訳されてきた experiencing という術語は、それが前言語的物質過程を表意する操作概念であることを明示するべく、「体験流」と改めるのがよいと考える。従来訳はデューイ、ディルタイの哲学にまぶされた現象学に逆規定されている）。

オグデンから逆にジェンドリンを読むことによって、「体感傾聴法（フォーカシング）」の重要性の再発見と問主性論・身体論・言語生成論の前進という果実を期待したい。そして翻ってこれを、われわれの抑うつボジション論の深化豊富化につなげることを目指したい。

1-4 ところでヨハネ「福音書」16章の読み解きに関し、「体感傾聴法（フォーカシング）」がその威力をもっとも発揮するのは、次のような弟子発言を解釈する場面である。

筆者はこの文言に初めて接したとき、「慶賀するような明るさと他方での虚ろさ」、「どこか芝居がかった調子の良さ」が感じられてならなかった。また「上滑り」という点ではニコデモ発言（3,23）と似ていると思った。

16:29弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえをもちいられません。
16:30あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」

そしてそれ以降は、このような感じがなぜ生まれるのか、その理由を知りたいと思い続けていた。その後少しの前進はあったが（別述）、この弟子発言が実は、言語発生的人間的機微に精通した強力なレトリカーであるヨハネの創発による、まことに巧みなディスクールであることが、ジェンドリンの理論を通じて初めて筆者に知れたのである。

ところで、この箇所に対する従来の釈義は、この発言によって表明された信仰内容、つまり「イエスの全知」と「イエスの神的起源」を追認する、ということに尽きている。それは宗教言語としての FORCE とはならない。

「体感傾聴法（フォーカシング）」を身につけた観察者は「EXP スケール」の7段階と照合した測定値から、『この弟子たちは知識は増しても人格変化には決して至らない』と、即座に評定するだろう（筆者は2.0～2.3と評定する）。評定を切り下げてしまう諸点は、自分にかかわる個人的なこととして語られていないこと、知性化された言動の下に感情が消されていることであり、これで段階評定は前者によって4未満、後者によって3未満となる。

（EXP スケールの内容とその運用例についてはたとえば、池見陽著『心のメッセージを聞く』講談社現代新書、村山他著『フォーカシングの理論と実際』福村出版を参照されたい）

後の本論部で詳しく論ずるが、このような「弟子たちの信じたつもののディスクール」は、使徒言行録における「昇天するイエスを見上げる弟子たちの記述」（「デイを外部注入するロゴス中心主義」のルカ言語）への強力なアイロニーを込めたデフォルメなのである。あの場面の弟子像に出現している、「自分にかかわる個人的なこととしてつかむことをしない姿勢、知性化された知識の下での感情消失」を、ヨハネは抑うつ的パトスの次元を爆発させつつ、このデフォルメを記述することを頂点とする一連の念入りな手続きによって、批判しているのである。

第二章 フォコニエ「マッピング理論」との対話

2-0 ヨハネ「福音書」は、降下来臨・上昇退去の道行きの全体を現在的に充溢させて現臨する人の子・イエス（＝全時の人の子）が主体となっていて、物語の舞台は、地上のイエスの時＝「かの時」のものと、ヨハネ共同体の時＝「同時代」のものが二重に重ね合わさっている。16章はそのことが極限的に浮き上がってきている。ところで二重の時間構造は広く認められてきてはいるが、時間と舞台の二重化がテキスト生産と意味構築に何をもたらしているかを考察する手だては見つからないままであった（大貫隆氏の「地平融合」の論はなお、「意味論的に自律している」テキストを、客観的意味論に語用論を接合して解釈する位相でのものである）。

2-1 能の《江口》(世阿弥自筆本)について説得力あり刺激的な解釈が提出された(飯塚恵理人『夢幻能の方法と系譜』雄山閣 2002)。氏の解釈の特質を取り出してみよう。

氏によるならこの曲の筋は、主人公江口の君はもともと普賢菩薩が「恒順衆生」の願により遊女の身をとって地上に到来した化身なのであり、曲の前ジテはこの遊女の幽霊であり、後ジテは諸国一見のワキ僧の弔いを通じて、西行との間に交流のあった「昔」を懐古することによって普賢菩薩の姿にもどるとともに、「白雲にうち乗りて西の空に行き」消えていった(=ワキ僧にとっては観仏の願の成就)のである。

氏の論述には客観主義的意味論による読み(シテの遊女が悟りを得て普賢菩薩へと変化するという解釈)を否定し、語用論的意味論(ワキ僧つまりは結局観客の、「菩薩を観る」の願いが実現され信仰の境位が深化していく方向への定位)を展開する議論がある。氏はさらに、全体対象シテの幽明両界の往復に基づいてテキストの「昔(西行と遊女江口の君との出会い)」と「今(ワキ僧と江口の君の幽霊との出会い)」との「二重化」が創出されていることに強く注目し、さらにその上、この「時の二重化」を語用論的に機能させる要因を摘出する、という貢献を行っている。その要因とは、民間に伝わっている二つのフレームが暗黙のうちに導入されていることであって、ひとつは性空の直接体験の物語(目を閉じて普賢菩薩を観、目を開けては遊女を見た、という体験)と阿弥陀如来の西からの来迎という教説であったというのである。

2-2 ヨハネ「福音書」とよく似た物語構造をもつ(世阿弥自筆本)《江口》についての飯塚氏の優れた分析の中で、われわれにとってもっとも有益と思えるのは〈時の二重化、舞台の二重化を語用論的に機能させる所以となるフレームの導入〉への注目である。これはフォコニエのマッピング理論における「混合スペース」の特性を鮮やかに深化しているからである。

認知言語学のメタファー理論はメタファーの機能を、体験世界(たとえば人生)から概念世界(たとえば旅についての観念)への写像(ソースドメインからターゲットドメインへの写像)であるとする。この理論は、すでに「体験の概念化・象徴化」の考察にとって欠かし得ないものとなっている。フォコニエ著『思考と言語におけるマッピング』(相原他訳 岩波書店 2000 原著 1997)の第1章は、パソコンの「ウィルス」というメタファーを素材にして、メタファーとしての写像・投射によってどれほど重層的でダイナミックな認知活動の連鎖が生ずるかについて豊かに論じられていて、以下の議論の前提となる、ぜひ参照されたい(なおこの書物の6章ならびに、辻幸夫編「ことばの認知科学事典」大修館書店 2001 相原茂論文は下記の資料ディスカールに言及している)。

ところでフォコニエのメンタルスペース理論の発展としてのマッピング理論は、上のメタファー理論の二つのドメインの関係をさらに深く動的に規定して、意味構築の創発構造を浮き上がらせるために、あと二つのスペースを仮設する。「通有スペース generic space」と「混合スペース blend」がそれである(1960年代のジェンドリンの体験象徴化論をこのマッピング理論に組み込み、後者の演算主義的抽象性を克服することが要請される)。

以下では、相原茂編『認知言語学の発展』ひつじ書房2000所収のフォコニエ論文「日常言語における創造性」から、「時間の二重化をテーマとするディスカール」における意味構築に関して、混合、通有スペースの機能の

ポイントを確認しておこう(同書田窪・金水論文, スウィーツァ論文も参照されたい)。

〈通有スペース・混合スペース〉の機能

二つの航海の進行状況を含んでいる「入力スペース」 I_1 , I_2 に通有する, 一般的な, より抽象的な構造と構成を反映するのが通有スペースであり, 逆に通有スペースの諸要素の別々の形態での「具体化」として I_1 , I_2 内の要素の上に投射が行われる。多様な種類の投射の中で, いわばプロトタイプとなるものが析出する(われわれは要素の通有性という客観主義意味論の残滓を,

〈共鳴の仕方〉そのものの解明という方向へ解体することが必要だと考える)。さて通有スペースと I_1 , I_2 との関係の豊富化が基盤となって, 混合スペースでは, スペース I_1 , I_2 の必ずしもただちには対応しない要素どうしも組み合わせられていき, もともとは存在しなかった新しい関係が利用可能となる(合成 composition)。重要なことはこの混合スペースに, 背景フレーム, 認知的文化的モデルについての共通認識が導入されることによ

って, 既に合成されている新しい諸構造全体がさらに全く新しく創出されるより大きな意味体系のなかに組み込まれていく, という点である(完成 completion)。上記ディスクールでは140年の時間差を消去して, 航海のコースとスタート時刻とが混じ合って, 「ボートレース」のフレームが眼前髣髴と出現したのである。「完成」とは従来の意味が消失するのではなく, むしろ強く保存されるが, より新しい大きな意味体系の一部となることによって変容したものとなることである。さらに混合スペース内部で, それ自身の創発原理に従って認知作業が行われることによって「混合スペースの管理」が行われ(精緻化 elaboration), こうして混合スペースの「創発構造 emergent structure」は自律的ともいえる運動を続けつつよりきめ細やかに洗練されていく。

この混合スペースにおける導入フレームは, 夢幻能《江口》では性空物語であった。ヨハネ「福音書」ではそれは〈福音書という文学形式〉そのものであるとわれわれは考えたい。つまり, ヨハネ「福音書」では, 「かの時」 I_1 と「ヨハネ共同体の同時代」 I_2 とを二重に重ねたうえにひとつの礼拝空間(両時代を貫いて全時的に充滿した命として現臨する人の子・イエス, この方を礼拝する空間)を創出する機能として, 福音書形式そのものが「使用」されたのである, と考えてみよう。そうすると, 福音書形式の拘束力から相対的に自由に, 「ヨハネ共同体の同時代」 I_2 そのものを考察しうる隙間が獲得できる。同時に弟子論的視点からは時間差が混じ合って「福音書」形式そのものが自己解体し, 「弟子論的内包」が「キリスト論的内包」と相互補完的に響き合うかたちで出現することになる。

混合スペースにおける導入フレームと, もとの二つの入力スペース I_1 , I_2 との間の豊かな相互作用の実際と研究方向の展望が上掲『思考と言語におけるマッピング』に記述されている。大きな期待をもって, ヨハネ「福音書」の読み解きに役立てていきたいものである。

〈資料ディスクール〉

As we went to press, Rich Wilson and Bill Biewenga were barely maintaining a 4.5 day lead over the ghost of the clipper Northern Light. ……印刷に回す時点では, リッチ・ウィルソンとビル・ビウエンガは, 快速帆船ノーザン・ライトの亡霊にかろうじて4・5日分のリードをもっていた……

[1993年にサンフランシスコからボストンに向けて航海した双胴船の進行状況を, 1853年に同じ航海を行った快速帆船の進行状況と比較して報告している, ヨット雑誌の記事]

